

Nara Women's University Digital Information Repository

| | |
|-------------|---|
| Title | カップルにおける性別役割行動と関係満足度の規定因に関する研究 -恋愛関係および夫婦関係における検討- : 内容の要旨および審査の 結果の要旨 |
| Author(s) | 赤澤, 淳子; 澤井, 勝; 麻生, 武; 八木, 秀夫; 清水, 新二; 中道, 實 |
| Citation | 博士学位論文 内容の要旨および審査の結果の要旨, vol.22, pp.113- 120 |
| Issue Date | 2005-08 |
| Description | 博士(学術),博課第269号,平成17年3月24日授与 |
| URL | http://hdl.handle.net/10935/1262 |
| Textversion | publisher |

This document is downloaded at: 2019-01-16T09:12:13Z

| | |
|---------|--|
| 氏名(本籍) | 赤澤 淳子 (岡山県) |
| 学位の種類 | 博士(学術) |
| 学位記番号 | 博課第269号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科 |
| 論文題目 | カップルにおける性別役割行動と関係満足度の規定因に関する研究 —恋愛関係および夫婦関係における検討— |
| 論文審査委員 | (委員長) 教授 澤井 勝 教授 麻生 武 教授 八木 秀夫 助教授 清水 新二 教授 中道 實 |

論文内容の要旨

近年、様々な社会的情勢の変化により、男女のライフスタイルも変化し、それに伴い「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性別役割観も平等主義的に変化しつつある。しかし、意識の変化に行動の変化が伴わず、現実には、家庭における性別役割分業体制は依然堅固である。意識の上では男女の性別役割を肯定的に捉えている者が減少しているにもかかわらず、実態が変化しないのは何故か。本研究は、その疑問の解明を試みるものとして位置づけている。

それらの疑問の解明にあたり、本研究においては、夫婦のみならず恋人関係を包含した親密な二者関係を対象として検討している。分析対象に恋愛関係を含めたのは、性別役割に沿った行動が男女一対の場面において生起しやすいという指摘があるからである(土肥、1985)。恋愛関係においては、夫婦関係とは異なり、性別による分業はルーティン化されておらず、比較的自由に行動を選択できる印象がある。しかし、性別役割の固定化は、実は、結婚の前段階の恋愛過程にも組み込まれているという指摘もある(柳原、1991)。性別に沿った役割分業は、夫婦となったことを契機として、必然的に生じるのか、あるいはそれ以前の恋愛過程において、徐々に増えていくのか、本研究は、恋愛の芽生えから婚姻の成立、さらに夫婦関係の維持という関係の進展に応じて、性別役割分業のあり方がいかに変わるのか、—もしくは変わらないのか—の解明の端緒を得ることを目指すとしている。具体的には、まず、夫婦になる前段階の恋愛過程にあるカップルにおける、性別役割行動遂行の規定因の検

討を第一の目的とした。さらに、恋愛過程で遂行される行動や意識が、恋愛関係にある男女の関係満足度にいかなる影響を及ぼすかの検討を第二の目的とした。

近年、恋愛結婚の比率は結婚全体の9割にも達する。恋愛を経て結婚した男女は夫婦となるが、その夫婦における性別役割分業体制は顕著である。夫婦間においても、他の社会的関係と同様、互いが軋轢なく共生するために、財の交換が行われるが、交換対象となる財の一つとして、性別役割に沿った分業も含まれる。家庭内外の役割を誰がいかに分担するかは、夫婦関係のみならず、個人の心理にも大きく影響する。家庭内の役割分担の不均衡が妻の不満感を高めているという報告の一方で、性別役割に沿った分業体制が変化しにくいのは、それを甘んじて受容する者も存在する可能性を示している。「少子化社会における勤労者の仕事観・家族観に関する調査研究(2001)」では、現代においても少数ではあるが、専業主婦志向に代表されるような動向も看取できるとの報告がある。つまり、女性にしてみれば、従前の性別役割に沿った分業が必ずしも不満を高める要因とはならない場合もある。夫婦のありように応じて、性別役割分業の様態も異なり、当然ながら、その規定因も多様であることは想像に難くない。そこで、本研究では、夫婦における性別役割に沿った分業体制の規定因を明らかにすることを第三の目的とした。また、分業体制が夫婦の関係満足度及び個人の充実感にいかなる影響を及ぼすかについて検討することを第四の目的とした。

まず、第Ⅱ部では、第Ⅰ部に概観した先行研究から導出された、性別役割行動に影響を及ぼす可能性が高い要因—性別役割の自己認知、関係の進展、恋愛意識—と性別役割行動との関係について検討した。そして、その結果を基に、性別役割行動の規定因を組み込んだ仮説モデルを構築した(第5章)。そして、性別役割行動を含む恋愛行動の尺度を構成し、それをを用いて先の仮説モデルについて検証し、性別役割行動を含む恋愛行動の規定因について検討した(第6章)。さらに、恋愛関係にあるカップルを性別役割の自己認知、恋愛意識、恋愛行動の遂行度により各々分類し、関係満足度及び関係関与性についてカップル間の比較検討を行い、関係満足度及び関係関与性の規定因について考察した(第7章)。

次に、第Ⅲ部では、結婚に関する意識調査の分析を行い、恋愛関係から夫婦関係に移行する男女の意識を、結婚年齢、結婚相手の条件、結婚のメリット・デメリットという点から検証し、そこに見られるジェンダーの差異及び影響について考察した(第8章)。

さらに、第Ⅳ部では、夫婦を性別役割観、収入、妻の就業形態等により各々分類し、性別役割行動への貢献度についてカップル間、夫婦間の比較検討を行い、性別役割行動への影響について詳細に検討した(第9章)。また、衡平モデルを導入し、年齢、性別役割観、収入、衡平性の認知により、関係満足度等にいかなる差異が見られるかについても検討した(第10章)。そして、社会的交換理論の種々のモデルを構成する変数を導入し、性別役割行動の規定因、及び夫婦の関係満足度の規定因について検討した(第11章)。

実証的検討において得られた知見は、以下に要約される。

1) これまで、性別役割観や性別役割の自己認知の測定尺度は開発されてきたが、性別役割行動を捉える尺度はなかった。本研究では、第6章第1節において、ジェンダーの視点を取り入れた恋愛行動尺度が構成された。これは、男女ともに6因子から成り、その中には、先行研究において見られる、性的な行動、自己開示行動、デート行動の他に、男女別に期待される性別役割行動（男性役割行動・女性役割行動）が恋愛行動として含まれている。

2) 先の尺度を用い、恋愛行動の規定因について検討した結果、結婚の可能性及び交際期間という関係の進展度、性別役割の自己認知、恋愛意識が恋愛行動の規定因であることが明らかになった。性別役割行動に関しては、男性では、結婚の可能性の高さが、男性役割行動の遂行度を高めていた。また、女性では、結婚の可能性が Eros を高め、Eros が高まると女性役割行動の遂行度が高まるといように、結婚の可能性が間接的に女性役割行動を高めていた。また、女性が女性別役割行動を遂行すると男性が男性別役割行動の遂行度を高めることから、Murstein (1977) らが指摘する恋愛過程の最終期に生じる相補的な役割が、男女別に遂行されていることが示唆された。すなわち、夫婦となって近代家族を形成する前段階において既にそのイメージを先取りするかたちで、性別役割分業が始まっていると見なし得る。換言するなら、性別役割分業は、夫婦になった時点で固定化するのではなく、恋愛中のカップルが結婚を意識し始めた時点で、遂行され始めるという可能性が高いといえよう。

3) 性別役割の自己認知、恋愛意識、及び恋愛行動の遂行度によって、カップルを分類し、関係満足度及び関係関与性に及ぼす影響について検討した。その結果、恋愛における最も典型的かつ一般的意識である Eros や、愛他的な意識である Agape の高さが、関係満足度と関連することが分かった。また、遊びの愛と称される Ludus が低いことも、カップルの関係満足度に影響していた。恋愛行動については、性的な項目が多く含まれる親密交際行動や、自己開示や会話行動から成る相互理解行動の多さが、関係満足度と関連していた。しかし、男性役割行動や女性役割行動については、唯一男性役割行動の遂行度が高い女性において、関係満足度が高い結果が示されたのみであった。恋愛関係の満足度には、男女のジェンダーに沿った行動の影響は見られなかった。つまり、恋愛関係においては、結婚の可能性とともに性別役割行動の遂行度は高まり、遂行度にも男女差は見られるが、それは夫婦関係ほど固定したものではなく、関係の満足、不満足に影響を及ぼすには至っていなかったのである。

4) 夫婦における性別役割分業の規定因を検討した結果、夫が平等主義的な性別役割観を持っていると、夫の家事参加が促進されることが示唆された。夫のみが平等な性別役割観を持っている夫婦の場合には夫の家事参加は高まるが、妻だけが平等的な性別役割観を持っている夫婦の場合には、夫の家事参加は高まらないことがわかった。つまり、個人の性別役割観の影響だけでなく、カップルの組み合わせにより、性別役割分業の認知に影響が示されることが明らかになった。また、妻の収入が夫と同じか高い場合や、妻が常勤で働いていると、夫の家事への参加が高まることが分かった。以上に

鑑みれば、妻の経済的な地位が向上すると、夫の家事参加が高まる傾向があると考えられるのである。

5) 衡平モデルを導入し、性別役割観・収入・年齢と、夫及び妻の家事等の衡平性の認知の組み合わせに応じた、夫婦の関係満足度及び生活充実感の相違を検討した。その結果、性別役割観、収入、年齢の如何を問わず、家庭内の仕事に関して衡平であると認知することが、妻の満足度を高める要因であることが判明した。しかし、収入を得る仕事に関しては、妻の年齢による差異が示され、20代、30代の妻では、衡平利得であると認知する者より、過大利得であると認知する者の関係満足度が高く、40代では、両者の差は示されず、50代では、20代及び30代とは逆に、衡平利得であると認知する者の満足度が過大利得であると認知する者の満足度より高くなっていた。この結果は、年齢の変化に伴う女性のライフスタイルの変化に起因するものと予測される。夫においては、低収入の夫では、過小利得、衡平利得と認知する者が、過大利得と認知する者より、生活充実感が高くなっており、「衡平利得者の満足度や精神的健康度は、過小利得者より高い」という先行研究とは異なる結果が示された。この結果は、低収入の夫においては、特に男性に対する性別役割期待にとらわれている状況を示唆するものといえよう。

6) 社会的交換モデルを導入し、夫婦の関係満足度及び生活充実感の規定因を検討した結果、夫の夫婦関係満足度においては、他者成果の影響が大きく、夫は「妻がありがたがっている」という認知により、関係満足度や生活充実感が高まっており、そこには非常に愛他的な夫の姿が窺われた。一方、妻の関係満足度においては、「夫がありがたがっている」という他者成果だけでなく、「自分も報われている」という自己成果の大きさが影響する。カップルの関係満足度（夫と妻の関係満足度の和）においては、特に家庭内の役割に関する変数が、収入を得る仕事における変数以上に、大きく影響を及ぼしていることが分かった。また、生活充実感においては、選択比較水準と他者成果を除くと、夫では「収入を得る仕事」の自己投入の認知が、妻では「家事・子育て」の自己成果の認知が、充実感に影響を及ぼしていた。夫と妻の間にこのような違いがあるのは、性別役割分業における労働の質の差が影響していると考えられる。

検討の結果、性別役割行動は、恋愛関係、夫婦関係という親密な二者関係において再生産されていることが示された。特に役割が固定化している夫婦関係においては、その分担のあり方が夫婦の関係満足度や生活充実感に大きく影響していることが明らかになった。恋愛、結婚は個人の問題や選択でもあるが、それらが社会に及ぼす影響は大きいと思われるし、恋愛等に社会の影響が全く見られないとはいえない。本研究で示されたように、規範とは無縁であろうと考えられている恋愛関係においても、性別役割行動の遂行にはジェンダーの影響が見られるし、夫婦関係においては、一層それが顕著に現れる。特に夫婦の性別役割分業における、夫と妻の非対称性は、夫婦の関係満足度にも影響する。さらには、晩婚化、未婚化、少子化を急速に進める原因となるうる可能性もあり、大きな社会問題となる可能性もあろう。

青年期の男女が、性別に固執せず、柔軟に行動を選択するために、そして、男性の性別役割観が平等主義的に変化するために、さらに、男女が対等な関係を構築するためには、ジェンダー・フリー教育の必要性が示唆される。

今回の調査においては、関係の進展について、横断的なデータを用いたり、結婚の可能性等の指標を用いたりしたが、今後は実際に時間的経過を考慮に入れた縦断研究を行い、結婚に至るまでの行動の変化を調査する必要がある。恋愛関係のあるカップルが、結婚後どのように意識や行動が変化するか、結婚前後の縦断的調査を実施し、恋愛関係から夫婦関係に移行する際の変化を詳細に分析することは不可欠であると思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は恋愛関係と夫婦関係を性別役割行動とその認知という観点から分析するものである。すなわち夫婦および恋人関係という親密な二者関係を対象として恋愛の芽生えから婚姻の成立、さらに夫婦関係の維持という関係の進展に応じて、性別役割の自己認知や性別役割感、そして性別役割行動のあり方がいかに変わるのか、—もしくは変わらないのか—という課題の解明の端緒を得ることを目的とするものである。特にこのうちでも、その測定尺度が未開発であった性別役割行動の諸側面とその規定因について検討している。

まず、第I部「先行研究の概観と本研究の目的」（第1章から第4章）において性別役割研究およびカップルに関する先行研究のサーヴェイから性別役割行動に影響を及ぼす可能性が高い規定因—すなわち性別役割の自己認知、関係の進展、恋愛意識—を導出し、第二部の恋愛関係においてこれらの規定因と性別役割行動との関係について検討している。まず第二部第5章においてこれらの規定因を組み込んだ仮説モデルを構築した。一方でこれまで、性別役割観や性別役割の自己認知の測定尺度は開発されてきているが、性別役割行動を捉える尺度は先に触れたようにまだ形成段階とされているといえる。本研究では、第6章第1節において、男女学生400名に対するジェンダーの視点を取り入れた調査から、性別役割行動を含む恋愛行動尺度を因子分析等により抽出している。この行動尺度は、男女ともに6因子から成り、その中には、先行研究において見られる、親密交際行動、相互理解行動、否定的行動、デート行動の他に、男女別に期待される性別役割行動（男性役割行動・女性役割行動）が恋愛行動として含まれていることを明らかにしている。

第6章第2節では、先の尺度を用い、恋愛行動の規定因について、男女学生と社会人のカップルデータ78組を対象としてパス解析などで検討した結果、結婚の可能性及び交際期間という関係の進展度、性別役割の自己認知、恋愛意識（eros, agape, ludus など）が恋愛行動の規定因であることが示唆されたとしている。性別役割行動に関しては、男性では、結婚の可能性の高さが、男性役割行動の遂行度を高めていることが示唆されている。また、女性では、結婚の可能性が恋愛意識を高め、恋愛意識が高まると女性役割行動の遂行度が高まるといえるように、結婚の可能性が間接的に女性役割行動を高める傾向が見られたとしている。また、女性が女性役割行動を遂行すると男性が男性役割行動の遂行度を高めることから、Murstein（1977）らが指摘する恋愛過程の最終期に生じる相補的な役割が、男女別に遂行されていることが示唆されているとする。すなわち、夫婦となって近代家族を形成する前段階において既にそのイメージを先取りするかたちで、性別役割分業が始まっていると見なすことも可能ともいえる。換言するならば、性別役割分業は、夫婦になった時点で現れるのではなく、恋愛中

のカップルが結婚を意識し始めた時点で、形成され始める可能性が高いと指摘している。

第7章では、同じカップルデータを分析対象として、性別役割の自己認知、恋愛意識、及び恋愛行動の遂行度によって、カップルを分類し、その関係満足度及び関係関与性に及ぼす影響について検討している。その結果、恋愛における最も典型的かつ一般的意識である Eros や、愛他的な意識である Agape の高さが、関係満足度と関連することが示唆されたとしている。恋愛行動については、性的な項目が多く含まれる親密交際行動や、自己開示や会話行動から成る相互理解行動の多さが、関係満足度と関連していた。一方で恋愛関係の満足度には、男女のジェンダーに沿った性別役割行動の影響は見られなかったといってよいとされる。つまり、恋愛関係においては、結婚の可能性とともに性別役割行動の遂行度は高まり、遂行度にも男女差は見られるが、それは夫婦関係ほど固定したものではなく、関係の満足、不満足に影響を及ぼすには至っていなかったようである。

第8章で恋愛関係から結婚に移行する男女の意識をサーヴェイした後、第9章で社会人の夫婦で18歳未満の子を持つ236組について、夫婦における性別役割分業の規定因を検討している。夫が平等主義的な性別役割観を持っていると、夫の家事参加が促進されることが示唆された。夫のみが平等な性別役割観を持っている夫婦の場合には夫の家事参加は高まるが、妻だけが平等的な性別役割観を持っている夫婦の場合には、夫の家事参加は高まらない傾向が見られた。つまり、個人の性別役割観の影響だけでなく、カップルの組み合わせにより、性別役割分業の認知や遂行に影響がでることが明らかになった。また、妻の収入が夫と同じか高い場合や、妻が常勤で働いていると、夫の家事への参加が高まることが分かったとしている。

第10章では衡平モデル（投入と成果の双方の衡平な関係が、満足感を高め関係関与を深めるとする）を導入し、同じ社会人のカップルデータを分析し、性別役割観、収入、年齢の如何を問わず、家庭内の仕事に関して衡平であると認知することが、妻の満足度を高める要因であることが示唆されたとする。しかし、収入を得る仕事に関しては、妻の年齢による差異が示され、20代、30代の妻では、衡平利得であると認知する者より、過大利得であると認知する者の関係満足度が高くなるなど、年齢の変化に伴う女性のライフスタイルの変化に起因している差異が見られた。夫においては、低収入の夫では、過小利得、衡平利得と認知する者が、過大利得と認知する者より、生活充実感が高くなるなどの興味ある知見が示された。

第11章においては、同じ対象についてこの衡平モデル以外の社会的交換モデルを導入し、夫婦の関係満足度及び生活充実感の規定因を検討した結果、夫の夫婦関係満足度においては、夫は「妻がありがたがっている」という「他者成果」を認知することにより、関係満足度や生活充実感が高まる一方、妻の関係満足度においては、「夫がありがたがっている」という他者成果だけでなく、「自分も報われている」という自己成果の大きさが影響しているという結果がえられたとしている。カップルの関係満足度（夫と妻の関係満足度の和）においては、特に家庭内の役割に対する評価が、収入を得ること

に対する評価以上に、大きな影響を及ぼしていることが示唆されたとする。また、生活充実感においては、夫では「収入を得る仕事」の自己投入の認知が、妻では「家事・子育て」の自己成果の認知が、生活の充実感に影響を及ぼしていた。

以上の検討の結果、性別役割行動は、恋愛関係、夫婦関係という親密な二者関係において再生産されていることが示されている。とくに規範とは無縁であろうと考えられている恋愛関係においても、性別役割行動の遂行にはジェンダーの影響が見られるとともに、夫婦関係においては、一層それが顕著に現れる。特に夫婦の性別役割分業における、夫と妻の非対称性は、夫婦の関係満足度にも影響していることも示唆されたとしている。

以上のように、先行研究が多くない研究領域で、特に恋愛関係と夫婦関係にあるカップルデータの収集という難度の高い研究対象に対して極めて意欲的にアプローチし、適切で多彩な分析を加えることによって、多くの新しい知見をえていること、そのことによって夫婦関係と恋愛関係に性別役割分業というジェンダーの観点からひとつの照明を与えたことは、本論文の重要な成果であり、高く評価できる。もちろん研究対象地域や時期、対象が限定されていること、男性対女性という二者の関係に限定していることなど、その成果を家族論として展開するためにはなお慎重でなければならないが、今後の時間的に縦断的な調査を含めた研究の展開に期待するところは大きい。

以上の審査結果から、本審査委員会は本論文が奈良女子大学博士（学術）の学位を授与するに値する十分な内容を備えていると判断した。